

20周年記念号

DOWASの明るい未来に期待して

Prospects for a brighter future of DOWAS

酒匂敏次 (海洋深層水利用学会初代会長)

Toshitsugu SAKO

1959年、合衆国の州に昇格して祝賀気分に入っていたハワイではあったが実は深刻な悩みを抱えていた。州の経済を牽引してきた砂糖、パイナップル、ミリタリーのいずれにも先行き赤信号が灯っていたからである。ハワイの未来についての官学産有志による熱い議論のテーマは、熱帯農業、総合物流、情報通信、観光、イベントなど多岐に渡っていた。JMRに発表されて間もない最新の研究成果を紹介しつつ島の周囲の海が秘める地域資源の利活用に解決策を求める提案は、すぐには全員の受け入れるものとはならなかった。熱帯のどこまでも透明な海をイメージするだけに、その下数百mにハワイの救世主が隠れているかもしれないと想像するのは難しく、実行には暫しの時間が必要だった。

1970年代末、海洋分野に関わりを持つ産官学の論客が約一年間にわたってブレインストーミング方式の勉強会を重ねた。20世紀最後の20年間に対応する国の海洋開発長期構想案作成がテーマであった。それまで、海洋は宇宙、原子力と並んでビッグサイエンスと呼ばれ、大型のナショナルプロジェクトを柱に、国の研究資源を集中的に活用して、多年度単位で目標を達成するというモデルを想定していた。アポロ計画などがお手本であり、海洋分野ではIDOEのような多国参加型の先例が米国中心にすでに実行中であった。しかし、日本の海の多様性や海の利用の長い歴史を考えると、国内各地の資源と智慧に期待できる地域参加型の計画に改めるべきではないかというのが主な論点であった。その時の議論は、その後、80年代に入ってから生かされる。アクアマリン、マリノバージョン、マリントウン、マリ

ノポリス等々、国と地域をパートナーにした計画が構想され、実施された。アクアマリン計画に応募した200余の提案中海洋深層水利用は5件を数えたが、そのいずれもが、その後、日の目を見ることになる。

2047年秋、DOWASの創立50年を祝う記念イベントの開幕だ。一時会員数の減少が続き、年次研究発表会の家族的雰囲気がかの魅力の一つと考えられていたこともあったが、近年は様変わりだ。展示会場には海外のパビリオンもいくつか店開きして、カリブ深層海水ラム酒やタヒチアンディープブルーカクテルの試飲コーナーには人だかりができています。羅臼のグランプルも健在だ。変化はいつ始まったのだろうと考えると、ある国の大統領の離任演説の記憶が蘇る。任期中に成し遂げた数々の偉業を誇らしげに列挙した末、唯一の過ちは、就任早々気候変動に関わる国際協定から離脱したことだと認めたのだ。その後の国際社会の合意形成と行動は早かった。事態は急速に進んでおり、もはや一刻の猶予も許されない。最後の切札は海洋深層水の利用だ。大規模な利用となると効果も大きい影響も深刻だ。膨大な量の観測データを処理活用して、地球規模の最適解を手に入れれば、国際社会の同意をとりつけて事業を推進する。こんな複雑で難しい仕事を担当できる人はどこにいるのか？ DOWASの出番である。会場から聞こえてくる会長のメッセージには最近会員数の増えたAI人らしい確信に満ちた響きがある。ホモサピエンスの殻に閉じこもっていた時代は終わり、新しい時代の太陽が昇ろうとしていた。